

Ⅲ. 学校祭における取組み

長岡 咲子

斉藤 真子

1 中学文化祭の概略

平成元年度の中学文化祭における基本方針は、演劇コンクールとクラス展示を「テーマ」で統一させようというものであった。

生徒部から準備予定が配布されたが、最初の「テーマ」でまず各クラスとも話し合いがつかず暗礁に乗りあげた形になった。生徒自身が学校生活を掘り下げの中で問題意識を持ち、クラス全員が演劇と展示で総合的に表現する過程は教育的に意味がある。しかし、何を演劇で上演し、クラス展示で取り上げるかという具体的な内容の前の、抽象的な話し合いは、文化祭の経験のない中1にとっては雲をつかむような所があるし、三年目の今年は役者をやりたいとか、二年から引き続いて展示を担当したいと心づもりしている三年では、「テーマ」についての抽象的な議論より、早く脚本選定や展示の調査にとりかかりたいと考える。学年により、クラスにより、取り組み方の違いは、最初の「テーマ」における話し合いから始まっていた。

〈資料1〉文化祭準備予定

	演 劇	クラス展示
6月	テーマ決定(展示共通) 劇の全体構想 脚本作り 脚本完成 配役、スタッフ決定 本読み、立稽古…イメージ作り 各パートスタッフ準備計画(予算、制作物、分担、日程等) 資料、衣裳等、調達方法検討	展示全体イメージ検討 展示資料収集 展示内容決定 各展示品分担決定 レイアウト係決定 レイアウト計画概要
7月	美術制作開始 立稽古で演技をつめていく 特殊効果など方法検討	レイアウトシミュレーション 実寸による展示物配置検討 展示物制作に必要な物品を見積もる 予算、調達方法など
8月	学校での活動なし	学校での活動なし

9月	美術制作続行、完成 衣裳、音楽、効果、メイク完成 舞台リハーサル 問題点検討、手直し 劇進行の時間を計る 1. 演技の間を考える 2. 場面転換、道具の出し入れ 3. 裏方の手順練習 4. 音楽、効果、照明タイミング	パネル、白紙等の制作 作品の展示位置決定 展示パネル、台紙の取り付け方 (教室に傷をつけないように) 展示品の保管方法 (授業の妨げにならないように) 教室美化 (床、天井、壁の古い汚れなど)
10月	舞台リハーサル 舞台美術等保管	作品をパネル、台紙に取り付け 展示品の保管 展示の説明リハーサル

〈資料2〉中学演劇コンクール

1.日時 文化祭第1日、2日目の午後

2.場所 第一体育館ステージ

3.劇の内容

クラスのテーマに沿った内容

20～50分の長さで中学生にふさわしいもの
 脚本については次のいずれかとする

- 1 生徒自身が考えたオリジナル
- 2 既製の脚本を生徒が脚色したもの
- 3 脚本集などによっている既製の脚本

4.係と仕事内容

演出 クラスの演劇実行委員、脚本検討、舞台監督、演出

出演者 脚本をよく読み、その場面にふさわしい演技をする

大道具 各場面にあった背景、建物などの装置を製作する

小道具 各場面に必要な装置、道具を製作、あるいは調達する

照明 スポットライト、フットライトを効果的に使用、劇を盛り上げる。

音響効果 劇の場面に合わせた音楽や効果音をタイミングよく流す

学校祭における取組み

メイク	登場人物にふさわしいメーキャップを考える	い。教室の出入口は必ず現在の戸のまま使用すること
衣装	劇の場面、登場人物にふさわしい衣装を調達あるいは製作する	展示計画の流れ
5. 審査	感動の度合、あるいは内容の充実度によって、各クラスにふさわしい賞を贈る 昨年度（最優秀賞、優秀賞、ほのぼの賞、アイデア賞、努力賞など） クラス以外に演技賞、舞台美術賞、特別賞などを考えている	1 テーマを決める 2 具体的なプランを練る 3 資料収集の項目や製作する模型を挙げる。 4 教室全体のイメージを決める 5 各自の分担を決め、資料収集や模型製作に取りかかる 6 各部門のディスプレイの方法や手順を考える（台紙、パネル、取り付けの金具等） 7 教室の展示可能な場所の実寸を取り、レイアウトのシミュレーションを実施
6. 審査委員	各クラス演劇実行委員1名と教官代表数名で審査する	本番前の作業
〈資料3〉 中学クラス展示		1 教室の美化 2 教室の模様替え 3 使用材料決定、調達、パネル、台紙に貼り付ける 通常の授業の妨げにならないように、大きなものは分割する 4 前日、当日の取り付け作業の手順、分担決定 5 リハーサル、展示説明も合わせて行なう 6 当日までの展示品の保管
1 日時	文化祭期間中の半日	審査
2 場所	中学各HR教室	生徒全員と教官数名の投票により各クラスにそれぞれふさわしい賞を贈る
3 展示内容	演劇と同一のテーマによる資料、写真、模型等の展示	〈資料4〉
4 目標	自分達で選んだテーマにどう迫るか、どう訴えるかを考え、それを表現できることを学ぶ	演劇コンクールの演目
5 展示内容の例		中1A 「ゼロ弾きのゴーシュ」 中1B 「戦争は終わらない」 (最優秀賞) 中2A 「ヘアスタイル」 中2B 「モモ」 中3A 「Ride on Wind」 中3B 「緑の星の下で」 (優秀賞)
テーマ	コンピューター	クラス展示テーマ
資料	コンピューターの歴史 現在のコンピューター利用の状況 コンピューター社会の未来像 コンピューターと人間の関係 学校の授業とコンピューター	中1A 「宮沢賢治」 中1B 「第2次世界大戦」 (第3位) 中2A 「校則」 中2B 「時間」 中3A 「友情」 (最優秀賞) 中3B 「ドイツにおける戦争と平和」 (優秀賞)
展示	資料を基にB紙にまとめて貼る 資料説明の写真、絵などを飾る 実物のコンピューターによるデモンストレーション	
模型	研究所などで使用されているコンピューターの実物大模型 理想のコンピューター模型	
展示説明	コンピューター使用説明 スライド、ビデオによるデモンストレーション	
6 展示方法	展示資料、模型等を教室の壁面、掲示板、机上などにレイアウト計画にしたがって、配置する。 教室が展示会場となるので、教室の美化、模様替えも考えるとよい。	2 クラスの取組みについて
注意	教室が全く別の物に変わったり、部屋を分割するような大がかりなものはやめてほしい	〈中1Bの場合〉 一年生と言うことで、4月当初に2大学校行事である文化祭と合唱コンクールでは、クラス全員が協力団結して頑張ろうという話をしておいた。そこで、クラス全員の力の結集が文化祭の発表につながるという意

識で『文化祭の成功は君達の努力と団結の足跡』をスローガンにして取り組み始めた展示と演劇。

取り組み方として、①テーマ決め②展示発表の内容決め・脚本選び③役割分担(展示・演劇どちらも一人一役)④資料集め(中間報告)・練習 とこのように展示と演劇を同時進行で各生徒がかけもち2役で、このような過程を約3ヵ月に渡って実行した。

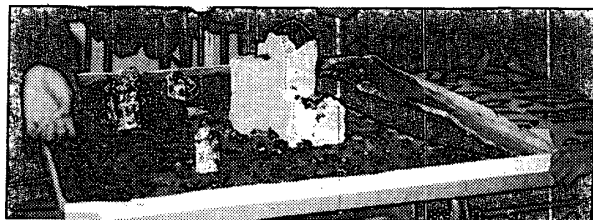
(1)テーマ決め

各生活班ごとにやりたいテーマを話合わせて発表させた。その結果、童話・アウシュヴィッツ・ナチス・人類の歴史・日露戦争・戦争という意見が出た。アウシュヴィッツ・ナチスという意見が出た背景には、やはり5月2日に行われた憲法講演会での(アウシュヴィッツ収容所を訪ねて)の話が、また人類の歴史は、希望参加であったが人類400万年展を見学に行ったことが、かなりの影響力を及ぼしたように考えられる。そこでテーマを絞るに当たり、約4時間の話し合いを行った。しかしその時点で、3年生がアウシュヴィッツに関するテーマで取り組むということで、大きくテーマを戦争・童話・人類の歴史の3つに絞って話し合いをした。最終的には、戦争と童話の2者に絞られたのだが何をみんなに訴えるのかという点で、童話では浅い内容になるのではないのか、見学者の人達には幼稚ではないかという反対意見が多く出て、戦争の悲惨さを我々の身近なところで調べてみようということになり、第2次世界大戦をテーマにすることになった。

(2)展示の発表内容

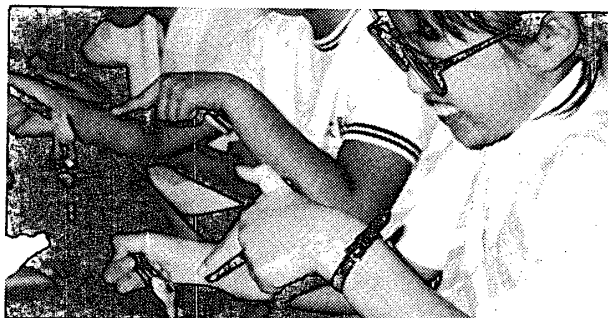
展示の実行委員で調べる内容を話合った結果、次の6つに決まり、クラス全員に希望をとってグループ分けをした。

- ①戦争中の生活内容(軍人・一般)
- ② 〃 食生活
- ③ 〃 服装
- ④武器
- ⑤年表と戦争の原因
- ⑥戦争の被害を受けた町並みの模型(広島)

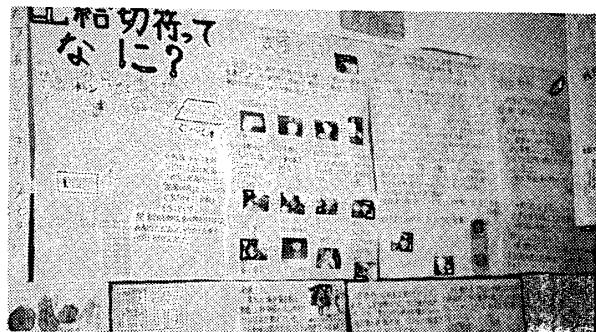


グループごとに、図書館で本を調べたり、社会科の先生のアドバイスをを受けたりしながら資料集めを始めた。一学期中に下書きの完成を目指したが、学級の時間だけでは間に合わず、毎日放課後4時30分までは全員残って作業をした。途中7月と9月の2回中間報告を各グループごとにさせた。

そこでは、おじいさんやおばあさんに戦争体験の話をしてもらいテープにとってみればと言う意見や、自分の家の近辺に戦争の被害跡があれば写真にとってみるのも良いのではないかという意見が生徒の中から出たりした。さらに新聞社に父親が勤めている生徒がいることから戦争中の新聞があればもっと様子が解るだろうという意見も出た。また、食生活ではおばあさんに作り方を教えてもらった炊とんを家庭科室で作って試食



をしてみたり、服装では実際に防空頭巾を作って先輩の先生に使い方を教えていただいて実演をした。そして、調べたことを各グループごとにB紙にまとめ、模型(広島原爆ドーム)を展示し、当日は調べた資料の中から一部抜粋してスライドにして説明を行い、パンフレットを作って見学時の内容把握に役立つようにクイズ用紙も中にはさんで配付した。



(3)演劇

脚本は、各生活班ごとに一つずつ候補を出してあらすじを説明し、その中から3つほど選んだ後、脚本委員で各脚本の詳しいあらすじと問題点などをまとめてレジメにして学級会で話し合った。

その結果、第二次世界大戦というテーマで、調べた内容が活かされること、そして全員参加なので配役の数等も考慮して登場人物の比較的多い高校生の演劇脚本集から『戦争は終わらない』に決定した。

これは原爆詩集をもとに作られたもので、戦後10年経って被爆した女子中学生が発病して死ぬと言う内容で、今なお戦争は終わらず苦しみを抱えている人達がいること、そして2度と同じ過ちを繰り返してはいけないと言う平和への願いを込めたものである。台詞が多くて動きが少なく、詩の朗読が挿入された劇で、上

学校祭における取組み

演時間の関係から脚本通りでは長すぎるので演出係が手直しをすることになった。また台詞の言葉がむずかしく、軍人の言葉などは役者の生徒がおじいさんに尋ねたりして仮名をふったり、衣装は展示で調べた資料の写真を参考にして係が用意した。効果・音響では玉音放送のテープを搜したり、特にBGMには苦勞をして、役者の気持ちや場面設定を演出係と話し合いを繰り返して、ようやく2週間前に決まった。ところが1週間前になって、劇全体を通して、今なお戦争は終わらず苦しんでいる人達がいるということ、そして平和への願いの訴えがまだ弱すぎるという意見が演出係から出てきてどうすべきか悩み始めた。その時、7月に行われた演劇鑑賞『黄色い扉』の劇中で、何回かスクリーンが天井から降りてきて歴史的な事実がスライドで写し出されたことが話題となった。そこで、空襲の様子や広島原爆の様子など展示発表の為に集めた資料からスライドを作り、劇の最後の詩の朗読場面で映し出す案が採用されて、原爆詩集の一節である『ヒロシマというとき ああヒロシマとやさしくこたえてくれるだろうか』と結んで終わることにした。

(4)文化祭を終えて

演劇も展示も保護者の方々の見学が比較的多かった。この取組みを通して、戦争についておじいさんやおばあさんと話す機会を持ったりした生徒がいたせいか、御老人の方も何名か見学されていた。

また、中学初めての学級単位での大きな取組みと言うことで大変な苦勞をしたこととクラス全員の協力を得ることができたことを生徒自身が肌で感じることで全員大きな満足感を味わい、終了後多くの生徒から「ヤッター！」という歓声と涙を流す光景が見られた。しかも演劇では最優秀賞、展示では第3位という素晴らしい賞をいただいて、感動の文化祭となった。

後片付けの時には、展示のB紙を歴史の授業で使って欲しいという要望が生徒の中から出た。



(5)生徒の感想（一部抜粋）

○展示委員となり、6月から準備を始めました。初めての経験なので何をやるにも話し合いを通じて行っていました。意見の食い違いによる混乱も何度かありましたが、みんなで協力しあって頑張りました。そし

てクラス展示前日、最終準備が始まりできあがっていくのを見てだんだん嬉しくなっていました。とうとう当日。大勢の人達に見に来てもらい、自分達が今まで頑張ってきたことが全部出し切れたと思いました。演劇では主役をもらい、夏休み中のセリフ覚えが大変でした。演出・監督の人達とこうした方がいいと話しながら練習しました。裏方の人達も見えない所で一生懸命3倍くらいの力を出して頑張っていました。(中略)最後の場面ではたくさんの人達に感動してもらい本当に嬉しかったです。私はこの文化祭を通して戦争について学び、また時間の大切さを知りました。そして、 $1/40 \times 40 + 1 = 100$ 一人一人が頑張る協力し合えばすごいことができるのだということを実感しました。(女子)

○広島のことを調べたときの被爆者の人達の写真に映し出された顔が忘れられない。こんな惨いこと・・・。さきこ雲や焼けただれた町並み、ケロイド。劇の最後にスライドで映し出すことに、反対する人もいたけれど詩に書かれていることや劇の事が真実として実感されて良かったのではないかと思います。そして文化祭を通じておじいさんの戦争中の体験話を聞くこともできて良かった。(中略)劇は大成功！ここまで大変だったけどいろいろな係でみんなが一生懸命努力して一つになることができたから素晴らしい劇ができたのだと思う。劇が終わって舞台裏からも観客の人達の泣き声が聞こえた。そして舞台ではみんなで、『やった～！』と声をあげて喜んだ。展示の方も一生懸命調べたかいたがあった。教室にはあってある『文化祭の成功は君達の努力と団結の足跡』という言葉通り、その足跡をしっかり残す事ができたと思う。(男子) (長岡咲子)

<中3Bの場合>

四月の学年初めから一月半、生徒自身の手で企画運営する二泊三日(白川郷・千里浜)の修学旅行が、5月18～20日に終るとその報告集をまとめるのと併行し、文化祭に向けて、クラステーマの話し合いに入りました。①消費税②リクルート③白川郷(家族制)④戦争⑤制服⑥校則等の中で、中三らしいもので演劇の脚本がきちんとしたものを選ぶ事から始まりました。④戦争が「ドイツにおける戦争と平和」というテーマに結びついた第1の理由はやはり、5月2日の憲法講演会「アウシュヴィッツ収容所を訪ねて」を聞いたからでしょう。演劇係が候補作としてあげた中から、脚本の読み比べを通して、岡一太作「緑の星の下に」にクラス全員が賛成したのは、ドイツ軍占領下のポーランドでエスپرانتによる平和への願いを内容としているという点でした。演劇の脚本が決まると、夏休みを控えて、中3Bでは、演劇の配役の決定と練習が始ま

り、クラスの人数の $\frac{2}{3}$ が演劇へ、残り $\frac{1}{3}$ が展示に分れました。展示係は、戦争の悲惨さに目を向ける事も必要だが、「平和とは？」を考えたいということで、クラス全員への「戦争と平和についてのアンケート」を実施します。そして夏休み前に調査・制作分担を次のように決めました。①アウシュヴィッツについて②アンネの日記について③現在のドイツについて④第二次世界大戦後の歴史について⑤ドイツ大使館との連絡・資料ビデオの利用。

さて、本年度の演劇鑑賞の「黄色い扉」は中3Bの演劇へ大きな影響を与えました。演劇コンクールで一番せりふの多いおじいさん役を見事演じ「演技賞」をもらったSさんは、この芝居の感想を「朝から、天候が悪いので、なんだか気持ちまでくもっていて、鶴舞まで出かけていくのは面倒だなあと思っていた。だけど、この劇を見る事が出来て、誠によかった。ドイツ人の誰もが、ユダヤ人に対して、差別していた訳じゃなかったのだ。(中略)フリードリヒが、ユダヤ人と知っても、世の中の間違った動きに流されないで、自分の意志をちゃんと持っているヘルガさんを見習いたいと思う。アパートの立ち退きを要求したり、職を奪ったり、黄色のベンチに座らせたりと、どうして一緒に生きている人間なのに、自分の都合の悪い事があると人の事を考えずに身も心も傷つけ、はじき出したり自分勝手すぎる。自分一人生きていく訳じゃないのだから、色々な人がいるのだから、人を思いやる心を大切にすれば、差別だって、戦争だって、きっと、なくせると思う。そして、飛躍したい。さて、今年、私は、演劇コンクールで老人の役を演じさせてもらうことになっている。この劇にも、老人がいらっしやっただので、特に注目していた。私にも出来るだろうか？という不安のようなものも少し感じたが、それよりも、私にだって、私たちにだって、きっと素晴らしいものが出来るはずだと勇氣にもなった。がんばります!!」と書きました。

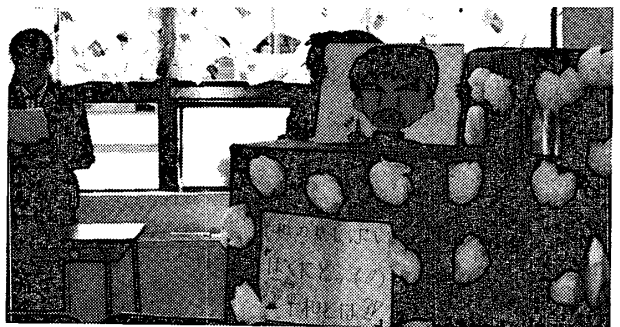
また展示係であるK君は、「この物語は、去年、二年生の時に国語の時間に勉強したものだ。そのため、最初から話の筋は知っていた。だから、新鮮味がなかったけれども、本で読んだものと、演劇では、また一味違ったような気がする。それは、本になかったナチス党やユダヤ人への圧迫の経過を年表にまとめたものや、本とは順番を替えてみたりしていたことなど……。この演劇は、僕達のクラスにはとてもいい題材だったと思う。なぜなら、今度の文化祭のクラスのテーマは「ドイツにおける戦争と平和」となっているからである。この演劇のおかげで、だいぶドイツの戦争のイメージをつかめたとまではいかないが、触れた位はあったと僕自身は思った。だから文化祭を成功させる

ためには、まず、この『黄色い扉』を頭の中にとどめておきたいと思う。(後略)」と感想文をまとめました。

そして、夏休みには、展示係は、「国際センター」へ行き、展示のために、アウシュヴィッツの関係の本を見、ドイツの地理、歴史を調べました。ベニア板に死体焼却炉の絵を丁寧に描いたI君は本校図書館に「アウシュヴィッツ展」のパネルが展示され、その時に寄贈された『写真ドキュメント、アウシュヴィッツ収容所』(グリンピース出版会)を参考にしました。

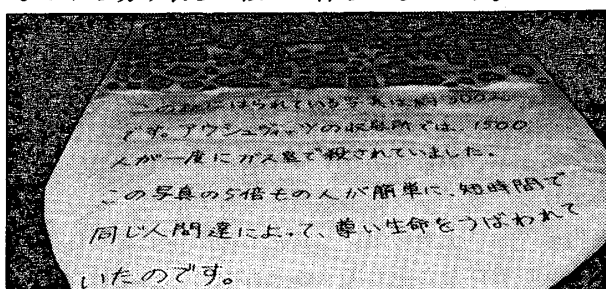
また、九月になって、効果係のN君が展示のために1989年8月13日のNHKスペシャル「過ぎ去らざる過去・西ドイツ50年目の夏」—今も続く犯罪追及、若者のアウシュヴィッツ体験旅行—と8月15日のシリーズ真相その3「ナチの嵐、少女たちの戦争」を夏休み中にテレビで見たと話してくれました。二学期になってから、演劇や展示の準備に追われるHRの時間をさいて、クラス全員が、視聴覚教室で視聴しました。手塚治虫の『アドルフに告ぐ』をクラスで回し読みをしたのもこの頃です。

さて、9月も終わり頃、文化祭の直前になると、計画変更を演劇も展示も迫られました。長いせりふにゆきづまった結果、脚本を書きかえ役者がふえ、全員が演出係になりました。展示では、「平和」の展示内容にゆきづまりSさんが紙芝居「ぼくにとつての平和とは？」のアイデアで原稿を書き始めたのは一週間程前のことでした。クラス全員の協力がみられた頃です。計画にはあったが展示にはならなかった、③「現在のドイツについて」のかわりに「紙芝居」が入りました。内容は、次の展示係によるプリントで概略をみることができます。

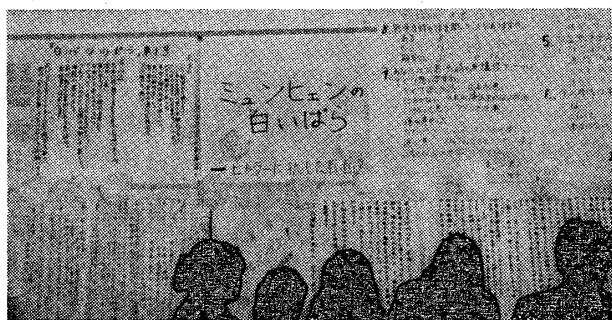


わたしたち中3Bの展示のテーマは『ドイツにおける戦争と平和』です。このテーマのきっかけとなったのは、やはりアウシュヴィッツ収容所のことだろうと思います。講演会での話の惨めさが頭の中にこびりついたのです。そのために、まず前方を戦争のコーナーとして、そのコーナーはアウシュヴィッツ収容所の雰囲気を出すようにして、その場所についての資料の展示をしました。黒板の前は、囚人が逃げださないように造られた有刺鉄線を再現しました。この有刺鉄線は

本物は、二重にされており、その上6千ボルトの高圧電流が流されていました。テレビには、先日、NHKで放送されたアウシュヴィッツ収容所の様子を画面を通してみなさんに見てもらいます。テレビの周辺は監視塔に見立てて飾りました。中央には収容所で死んだ人を顔写真として残しておく習慣にちなんで、新聞紙などから切り取って似せて作ったものです。

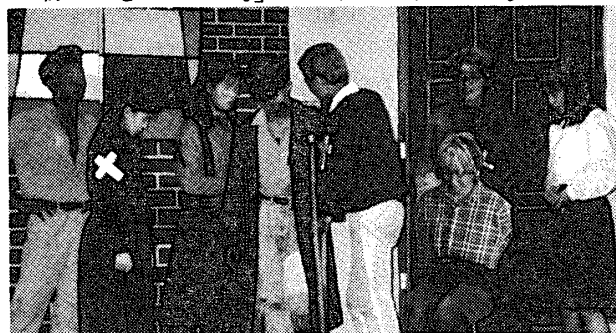


不気味さ、数の多さに注目して下さい。教室の半分の辺りを分けました。理由は、戦争と平和を比較するためです。単に並べたってしかたがないし、このテーマに決めた意義がありません。そのために戦争の雰囲気、平和の雰囲気を出すように努力をしました。境界の門は、アウシュヴィッツ収容所の門としました。文字に注目して下さい。平和のコーナーの方では、平和について、みんなで考え、作った紙しばいを上演します。また、中3Bで行った戦争と平和について調べたアンケート結果、戦争反対で戦った人たちの記録、歴史を少し展示してあります。両方のコーナーを比較して戦争、平和についてのみなさん一人一人のしっかりした意見を持ってほしいと思います。(中3B展示係)



10月5日の展示で全日程を終えた中3としての学校祭を、Tさんは「一応、名前には『祭』という字がついています。しかし、気分的にはそうではありませんでした。楽しかったけど、それより、もう終わったの？と、少しさみしいような感じがします。未練というか……。でも、演劇と展示の中心の人たち、すごく一生懸命で、その人たちの顔をみていると、何がうれしくなってきました。私は演技の所によくいたんだけど、演出、役者、照明共に、いろいろな意見をし合い、それによってこの演劇も大分良い方向に向かっていきました。結果は優秀賞。まずまずでした。前日の練習

がおわったあと、本番がおわったあと、みんなの表情がとてもいきいきしていました。これが中3Bになって初めて思いました。」とふりかえりました。



学校祭の後、中3は高校受験を控え、忙がしくなりました。ベルリンの壁がなくなるという歴史的事実を目のあたりにして、中3Bの1人1人が、「ドイツにおける戦争と平和」をもう一度考えました。

3. 成果と問題点

①平和教育という学校目標にそった指導の継続性

HR担当の指導の力点はクラスのみとまりや協力性にある。文化祭が終って生徒が心に残すものは、文化祭のテーマとして取り組んだ問題そのものよりも、クラスで協力したり、団結して感動できたことである。生徒レベルでは、「戦争」や「平和」という問題意識は、文化祭が終われば消えてしまう。

②教科との連携と時間保証

(A) 平和教育としての内容の深まりと充実を図るためには、教科(社)との連携が必要であろう。教科指導のバックアップがあって、生徒の興味関心を持続させ、知識の広がりをもたせることができる。

(B) HR指導では、図書館や社会科研究室での調査研究のための時間がとれず、授業や夏休みに行うしかない。「時間割」の中に、「平和」を考えるための時間を位置づけたい。「附属の時間」等が利用できるとうい。

③学校行事における平和教育の普遍的な位置付け

文化祭の取組み方として、演劇と展示を統一テーマで結びつけながら、評価においては、展示は、生徒全員の投票であり、演劇は、先生中心の審査員によるものである。両者の観点が不一致であり、先生側評価と生徒側評価の対立もある。また、その年ごとの評価で前年度との系統性はない。だから三年ほど不満を持つ。学校行事全体の見直しのなかで、総合的な意味の評価を考える必要がある。

(斉藤真子)